

3月下旬に、火曜日と金曜日の電話相談当番担当の5人と、学校や少年院、少年鑑別所などでスクールカウンセラーや職業相談、学習支援に当たっている3人が集まって教育相談部会を開きました。県内中学校でスクールカウンセラー（以下 SC）をつとめるO先生は高校の英語教師を定年退職したあと、大学院で心理学を学び臨床心理士の資格をとり、現在、県内4つの中学校で生徒の相談にのっています。その中から一つの事例を報告していただきました。

◇◇◇ ◇◇◇ ◇◇◇ ◇◇◇ ◇◇◇

部活の人間関係 自傷行為

中学3年女子。2年生の時に運動部のキャプテンになってから部員との関係が悪くなり、自傷行為が増えた。校内、教室内で自傷をおこない、それをクラスメイトに見られることにより距離をおかれる。部活動は続けたが、同じクラスに部活動で関係性の悪くなった生徒がいてストレスがたかまる。パニック状態になり、額を壁にぶつけるなどの激しい行動化が起る。そのためにますますクラスメイトとの関係が悪化する。別室登校の時期もあるが基本的には学校に登校している。

養護教諭が一番話しやすい存在

1学期は心身ともに不安定で、自傷行為が繰り返される。2年時のようなパニック状態になることは少なくなったが、生々しい傷を養護教諭に見せに来ることが繰り返され、養護教諭は対応に苦慮する。本人にとって養護教諭は校内で一番話しやすい存在。3年生になってから週に一度のSCの勤務日には毎回面談にくる。

SC面談では饒舌に語る

「自分は生きていてよいのか」「学校にいてよいのか」「教室にいても自分がそこにいる感じがしない」「腹痛・頭痛が続いて夜も眠れない」「悪夢をみる」「*幻覚がある」「クラスで疎外感を感じる」「ネットを通じて友だちを作って相談相手になってもらっている」「スカートをはきたくない」「部活の男子から好意を持たれている」「父子家庭だが、自分たち姉妹を育ててくれている父に感謝している」「自分が不安定であることで父に心配をかけたくない」「同時に父は怖い存在でもある」「小4の時に父母が離婚した」「母とはLINEで連絡を取り、時々会う」「母は

嫌い」 *この訴えは1度だけ

父との面談とその後

本人の了解を得て2学期末に父親と面談し、医療機関受診を検討するよう勧めたが進展はなかった。

2学期終盤からは以前にトラブルがあった友人たちとも話ができるようになり高校受験に向けていっしょに勉強するようになった。高校入試という「共通の不安」を手掛かりにして協働関係が生まれたようだ。自傷行為も少なくなった。「高校生活に期待している」「新しい人間関係の中でやり直したい」「パニックを起こしたりして友人に距離を置かれるようなことを繰り返したくない」「合格したら遊びに行くと母に約束した」と語るようになった。

SCの見立て

両親の離婚への過程でのさまざまなトラブルがトラウマとなっていると思われる。部活やクラス内での友人とのトラブルには本人の性格や特性が関係していると思われる。周りの気持ちを考えずに強い口調で指示、批判してしまう。母に対しては反発しながらも愛慕の情を隠しきれない。性的違和感自身存在に対する不安の一部とみることができる。

担任・養護教諭との協働関係を築いた

担任は本人について「わがままな生徒である」と認識しており、「主訴である幻覚をなくしたり、自傷行為をやめるようなアドバイスがほしい」と要請された。SCから「主訴は幻覚ではない」「自己存在への不安が主訴である」と述べた。「幻覚があったという話は1度限りであり、心理的苦しさゆえの解離が起きた可能性がある」「寄り辺なさに寄り添い、本人の語りに耳を傾けることが心理的支援になる」との見解を伝えた。自傷行為については「自傷しないように」と言うだけでは「自分の気持ちをわかってもらえていない」と思うだけ。自傷せざるを得ないほどの苦しさや生きづらさに寄り添うことで自制的になれるのではないかと見通しを述べた。

担任や養護教諭とのコンサルテーションを通じて、本人の抱える苦悩や「病理性」について情報を共有し、支える方向をともに追求してきた。その過程で彼らと信頼関係、協働関係を築けたことはSCとして大きな成果であったと考えている。